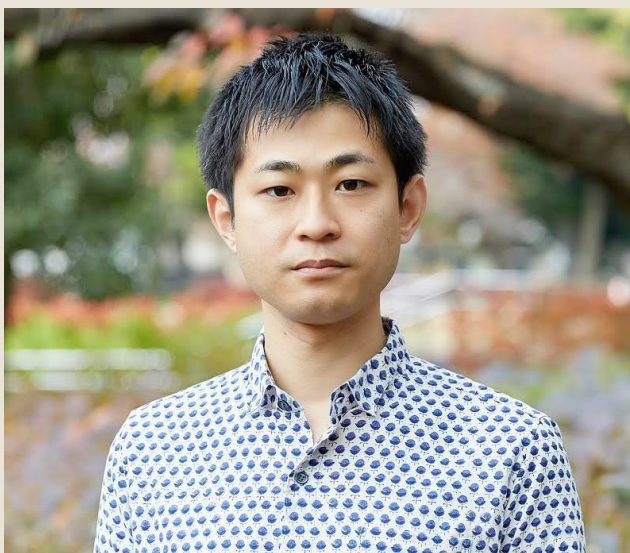


松山エデンの園40周年記念
オリジナルショートショート

思い出香

作 田丸雅智





◆田丸雅智氏（作家）プロフィール

一九八七年、愛媛県生まれ。東京大学工学部、同大学院工学系研究科卒。二〇一一年、『物語のルミナリエ』に「桜」が掲載され作家デビュー。十二年、樹立社ショートショートコンテストで「海酒」が最優秀賞受賞。「海酒」は、ピース・又吉直樹氏主演により短編映画化され、カンヌ国際映画祭などで上映された。坊っちゃん文学賞などにおいて審査員長を務め、また、全国各地でショートショートの書き方講座を開催するなど、現代ショートショートの旗手として幅広く活動している。

書き方講座の内容は、年度から使用される小学四年生の国語教科書（教育出版）に採用。十七年には四〇〇字作品の投稿サイト「ショートショートガーデン」を立ち上げ、さらなる普及に努めている。著書に『海色の壺』『おとぎカンパニー』など多数。メディア出演に情熱大陸、SWITCHインタビュー達人達など多数。

田丸雅智 公式サイト：<http://masatomotamaru.com/>

葬儀が終わって数日たっても、私はやっぱりどこかモヤモヤした気持ちを抱えていた。

本当にこれでよかったのかな……。

母とは最期までそれなりに一緒の時間を過ごせたから、その意味での後悔はほとんどなかった。あるのは、母がホームで最期を迎えたことへの複雑な思い。そして、そのホームへの入居を承諾して以来抱えていた、どこか後ろめたい気持ちだった。

老人ホームへの入居を考えている。

二十年ほど前、最初に母がそう言ったとき、私はすぐに反対した。たしかに母は高齢と呼べる年齢にさしかかっていて、父を亡くしてから一人暮らしになっていた。でも、まだまだ元気で不自由もなく、いくらなんでも老人ホームなんて早すぎると私は思った。母から聞いた入居の費用も高額で、それならマンションに引っ越すほうがいいんじゃないかと主張した。

しかし、母はそうじゃないのだと首を振った。

「介護とかが必要になってからじゃ入れなくなっちゃうホームだから、元氣な今だからこそその話なの。でも、入居したあとなら、いくら介護が必要になっても病氣になってもホームが最期まで全部お世話をしてくれて。たしかに費用は安くないけど、マンションだとそういうケアはしてもらえないでしょ？」

母の話に、私は疑う気持ちのほうが大きくなった。そうやって不安をあおって、早いうちから入居を促そうという魂胆なんじゃないかと。

もうひとつ、別のことも氣になった。元氣なのに親を老人ホームに入れただなんて周りに知れたら、無責任で冷酷な人間だと思われるんじゃないか……。

そんな私の心を見透かしたように、母は言った。

「まあ、周りは何か言うかもしれないけど、これは私が決めたことだから」

それから、私は何度も母と話して、ホームの見学にも行ったりした。そして最後は母に押し切られる形になって、しぶしぶ承諾したのだった。

私があるもの見つけたのは、ホームから引き取ってきた母の遺品を整理していたときだった。

《思い出香》

そう書かれた小箱が出てきたのだ。

開けてみると、コーンの形をしたお香がひとつだけ入っていた。

そういえば、お母さんはお香が好きだったな……。

なんだか懐かしさがこみあげて、焚いてみようかなと考えた。

私はお皿を持ってきて、火をつけた。煙があがり、爽やかな香りが漂ってくる。

視界が突然ゆらいだのは、その瞬間のことだった。

気がつくと、私は別の場所にいた。周りにもたくさんの人がいて、それぞれが楽しそうに談笑していた。

えっ？ えっ？ どういうこと……？

パニックになりかけていると、横から声が飛んできた。

「芳子さん、どうかされましたか？」

振り向くと、若い人が優しいまなざしでこちらを見ていた。私はなぜだか、ここは母の入っていたホームであり、この人はスタッフさんであることが自然と分かる。

そのとき、何も言っていないはずなのに、私の口から言葉が出てきた。

「いえね、みなさんという毎日楽しいなって、ぼんやり考えてたんですよ。この年になってこんなに素敵なお友達ができるだなんて、思ってもみませんでしたから」

自分の口から出てきた声、そして先ほど呼ばれた芳子という名前に、私はおのずと直感していた。どういうわけか自分はいま、元気だったころの母――芳子に乗り移っているらしい、と。

スタッフさんは口にした。

「それは、芳子さんが素敵の方だからですよ」

「いえいえ。みなさん一緒にいて心地がいい方ばかりで。それに、いつも一緒なわけじゃなくて、一人の時間も大切にされていて。そんな仲間に加えていただけで、本当によかったなあと思います」

話し手である母は、心の底からそう思っていた。そのことが私にもハッキリ伝わる。

やがて不意に視界がゆらいで、景色が変わった。

いつしか私は、別の場面での母になっていた。母はホーム主催のお話づくりの教室に参加して、初めての挑戦にドキドキしていた。でも、終わってみると予想外に悪くない作品ができあがり、恥ずかしさとうれしさが入り混じったような気持ちになる。

景色は変わり、次に見えたのは花壇の手入れをしている場面だった。真っ赤に咲いたバラを眺めて、充実感に包まれる。バラは母が育てたものだ。

景色は次々と変わっていく。

ホームの納涼祭では、盆踊りや夜店を楽しんだ。クリスマス会では、コンサートやパーティー食を楽しんだ。クラブ活動では、カラオケや卓球を楽しんだ。

仲のいいお友達と、一泊二日の旅行にも出かけた。

その旅の夜、みんなと身の上話になった。

芳子さんは、どうしてこのホームへの入居を決めたのか。

そう尋ねられて、母は言った。

「一番は、もちろんうちのホームに惹かれたからよ。あとは……じつは私、親の介護でなかなかしんどい思いをしてね。娘には同じ

思いを絶対にさせたくなかったの。私のほうも、娘に申し訳なさを感じながらお世話をしてもらうのは嫌だったし。まあ、そんなことを言おうものなら、あの子は何が何でも自分が面倒を見るって譲らないに決まってるから、最期まで話すつもりはないんだけど」私は衝撃を受けていた。

母が祖父の介護で大変な思いをしていたことは、はたから見えて気がついていていた。でも、母は私の前では愚痴ひとつこぼさなかったから、本当の気持ちまでは分からなかった……。

母はその旅の途中で、お香の専門店にも立ち寄った。そこで勧められたのが、作り手の思い出が宿するという思い出香というもので、母はその手作り体験に参加してみることにした。いつかホームのみんなとの日々を思いだして、懐かしむことができたかな。そんな程度の軽い気持ちで――。

視界がゆらぎ、気づくと私は自分の部屋に戻ってきていた。

目の前の思い出香は、燃え尽きて灰になっていた。

私の中で、さまざまな思いがこみあげてくる。

生前は母に会いに、私もよくホームを訪れたものだった。でも、楽しそうな母の姿を見るたびに、私の前で強がっているだけなのではと疑っていた。

晩年のことも頭をよぎる。

母は数年前に脳梗塞で倒れてからは、介護なしで生活するのが難しくなった。やがて認知症もわずらって、私のことも分からなくなかった。

そんな母を、ホームの人たちは全力でケアしてくれた。心強く、本当にありがたかった。その一方で、私は自分がお世話をしていないということに罪悪感を覚えてもいた。

でも、全部が見当違いだった。

お母さんは、心の底から幸せな日々を送ってたんだ。私の罪悪感だって、いつさい必要なかったんだ。

ずっとモヤモヤしていたものは、いつしか跡形もなく消え去っていた。私はどこか救ってもらったような気にもなり、こんな言葉が自然とこぼれた。

ありがとう、お母さん――。

そのとき、開いた窓から一陣の風が吹きこんだ。

お香の灰が、ふわりと宙に舞いあがる。

そして風は母の思い出を優しく包むと、どこまでも高い青い空へとのぼっていった。

田丸氏からのコメント

恥ずかしながら、老人ホームといえばケアが必要になってから入るところだという漠然としたイメージを持っていました。ですが、松山エデンの園での講座を通して入居者や職員の方々と触れ合わせていただくなかで、元気なうちだからこそそのホームという考え方があ
るのだと知り、その選択肢も素敵なものだなと実感しました。

本作はあくまでフィクションですが、当初自分が抱いていた決してポジティブではない素直な疑問も盛り込みながら、それに対する現場で見聞きした実際の様子を込めたつもりです。もちろん、この場所、この選択肢だけが「唯一の正解」であるはずがなく、さまざまな考え方があろうかと思っています。そんな中で、本作がまずは松山エデンの園のことを知っていただく機会となつて、今後の生き方について考えるひとつのきっかけになればと願っています。